『水滸伝』何でもセミナール

福建の本屋が腕によりをかけて作った新エピソード追加の絵入り『水滸伝』

イラスト・文／のじりまさひろ

『水滸伝』の一種に「文簡本」と呼ばれる一群のテキストがある。おおくは福建の本屋が印刷した物。たいてい各ページの上三分の一くらいに絵があり、下に本文がくる。福建の本は一般に粗製濫造で知られ、江南の丁寧な出版物に対抗していた。江南方面で印刷される『水滸伝』に対抗するため作り出されたのが、いわゆる文簡本である。

普通の『水滸伝』と大きく違うのは文章が圧縮されていること。『水滸伝』は文章がまたよいとされるのだが、それを縮め、ストーリー本意に進める。そして、もうひとつ。田虎・王慶の物語が挿入されていることである。

大雑把に言って田虎王慶のあるのが百二十回本、無いのが百回本であるが、その田虎王慶は文簡本が元祖である。文簡本が大量に出回ったので、江南の本屋が対抗してつくったのが、百回本に田虎王慶を挿入した百二十回本なのだ。

しかし、文簡本の田虎王慶は、われわれが目にする百二十回本の田虎王慶とは全然ちがった雰囲気を持っている。一言でいえば荒唐無稽だ。まず、地名が適当で、梁山泊の進軍ルートも一本道。田虎篇などはその地名の一つに玉門関とはるか西方の地名があてられている。百二十回本で現実の地名が出てくるのと比べればじつにおおらかにつくってある。

また、迷魂洞（中に入った者は昏々と眠り続ける）や懸纏井（中には仙洞がある）というような不思議な場所もある。妖術使いもたくさん出てきて、梁山泊軍を悩ませる。それを破るためにまた神サマやマジックアイテムがでてくる。全体にマジックパワーが幅をきかせているのだ。

生まれ変わり話もおおく、田虎篇で仲間になる孫安・瓊英・喬道清はそれぞれ九龍湾竜王・六甲之主・広法金童の生まれ変わりで、梁山泊軍を助けるために下生（生まれ変わり）したのだとか。王慶にまつわる前世の因縁話も出てくる。

こんなめちゃくちゃな話もある。ある神サマは生け贄を欲するとか。宋江がそのかわりに饅頭をそなえたところ、神サマがおこって火を噴きながら追いかけてきた。これにどうしたかというと、他の神サマを呼んできて退治してもらうのである。

さて、文簡本では、喬道清は羅真人のおとうと弟子で、公孫勝はとてもじゃないが勝てず、羅真人に法術を教わりに行く。瓊英は田虎の親戚で、烏利得安の実娘、にもかかわらず張清が瓊英の実父を殺してしまう。この辺を比較すると百二十回本がどれだけ意図的に筋を変えたのかがわかって面白い。百二十回本はおもしろさよりも礼儀や正邪の別にうるさいのである。

田虎王慶部分に個人の物語がある王慶について見てみてみよう。文簡本では、高俅に憎まれたため罪人になり、龐元に憎まれて執拗に嫌がらせを受けたため、道を踏み外した、という梁山泊の好漢並みの物語を持っている。また物語の内容も生き生きとしていて面白い。百二十回本の王慶はある意味ではリアルなのかも知れないが、しかし、あまり気持ちよい人間ではないように描き直されている。

さて、最後に一つ。田虎王慶部分での新メンバーはなんとそのまま方臘討伐にも参加。文簡本、意外と凝ってますよ。